

## 18

## 粉屋の踊り

Manuel de Falla / Danza del Molinero

## 作品データ／濱田滋郎

バレエ用管弦楽曲〈三角帽子(El Sombrero de los tres picos)〉は、スペイン民族楽派の高峰、マヌエル・デ・ファリヤ(1876-1946)の主要作である。この曲の原形は1917年にマドリードで初演されたパントマイムのための楽曲〈市長と粉ひきの女房(El Corregidor y la Molinera)〉で、たまたまそれを見聞した有名なロシア・バレエ団の統率者ディアギレフからの依頼により、本格的なバレエ曲に改作された。バレエとしての初演は1919年7月ロンドンで行なわれ、その折は振付と初演がレオニード・マシーン、舞台装置と衣装がパブロ・ピカソ、管弦楽指揮者がエルネスト・アンセルメという願ってもない陣容で、大きな成功をかちえた。ここに抜萃され、ギター用に編まれている〈ファルーカ〉(または〈ファルッカ〉どちらでもいいだろう)はこのバレエの第2幕、聖ヨハネ(サン・ファン)祭の夜の場面で、〈村人たちの女房を持った伊達男ねながら踊る場面の〉呼ばれる。ファルーカはフラメンコ党ならおなじみの、2拍子の歯切れよい(ただし、ねばりのある)リズムをそなえたフラメンコ舞曲。もとはガリシア(北西スペイン)の抒情的な民謡からきたといわれるが、短調をとり悲壮な感じの曲趣はすっかりアンダルシア風である。南スペインのカディスに生まれたファリヤにとって故郷のリズムを扱うのはお手のもので、まことに見事なファルーカを書き上げている。彼の管弦楽法は独特な色彩感を湛えたものとして有名だが、ピアノないしギターに移しても味わいが消えないのは、音楽としての骨組みが確かに違つてゐるまい。

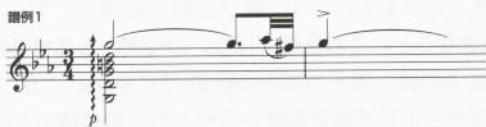
## 奏法解説／莊村清志

## ●ラスゲアードが決め手

ファリヤのバレエ組曲「三角帽子」に含まれている〈粉屋の踊り〉は、ギターで弾いてもたいへん効果的であり、日本ではイエペスの演奏によってよく知られていますが、私もオーケストラの総譜とピアノ譜を参考にして編曲しました。

まず最初の部分ですが、①のメロディーのホルンの音が残り、1拍めの和音は弦で弾かれすぐ消えてしまいますが、ギターでそのようにしますと残念ながらメロディーのGの

音が途切れてしましますから、譜面のように和音の音は2拍分保ち、3拍めで消すのがよいと思います。同じく①の第3拍の裏は、譜例1のように弾くのがよいでしょう。同じことが②の2拍の裏、そして③の1拍の裏、2拍の裏にもいえます。この部分は譜面どおりに弾きますと、非常に野暮



ったくなってしまいます。

④から⑥の頭までは *p* から始まり、徐々にテンポをあげて *f* までもっていきます。ここまではオーケストラでは、ホルンと指定されています。⑥は *a tempo* ですから、もとのテンポに戻ります。ここは、ヴァイオリンです。⑦から

⑧の頭までは右手で弾き直さないで、⑨の方が管弦楽の音のイメージに近くなります。つまり樂譜



で示しますと譜例2のようになるわけです。⑪の第3拍からスタッカートと書いてありますが、ここからはできるだけブリッジの近くで、右手親指の爪だけで弾くとよいでしょう。

さて⑮からは、ラスゲアードのイメージにピッタリの音が出てきます。ここ第2拍はオーケストラでは弦楽器で、すごい迫力で弾いていますが、ギターでも少しでもその迫



力に追いつくために譜例3のように弾きます。

mから*i ch am ip*までのラスゲアードは一気になだれこむように弾く必要があります。特に最初の音、つまり打ちおろしのmの音を一番強く弾き、後は惰性で他の指が付いていくという気持ちで弾くとうまくいきます。⑯の第2拍から4拍にかけて大きくディミヌエンドして⑰の2拍めから再